

は社会体制としての荘園制に対応する国家形態であると理解されている。第四は、「日本国」を領域として立論されていることであるが、この領域は荘園制が及ぶ範囲であり、国家的な規模の身分的な秩序が広がる空間でもあった。そして第五は、王法仏法相依論が権門体制論の支配理念、国家イデオロギーとして位置づけられていることである。

権門体制論が独創的な、全く新しい中世国家論を提起するものであっただけに、その影響は甚大であった。その観点を継承する研究が現れたことはいうまでもないが、一方では基本的な観点に関わる批判も出された。しかしそうした批判にもかかわらず、権門体制論は現在でもなお、中世国家を把握するうえで最も妥当な議論とみなされる。とはいえ、いくつかの問題をかかえていることも否定できない。それは大きく分けるならば、(1)天皇のみを国王とみる王権論、(2)「権門政治」という国政のとらえ方(国家意思の決定と国家権力発動のあり方の変化を把握できない)、(3)神社権門の独自性を考慮しない神社権門のとらえ方の三つになる。したがって、権門体制論は中世国家についての壮大な仮説、重大な欠

陥をもった未完の仮説であるとみなすべきであろう。

中世伊勢神宮の成立過程を究明することは、権門としての伊勢神宮の形成を明らかにすることである。それはまた神社権門の解明、ひいては神社権門の再検討に通じるものである。ここでとりあげたのは、中世伊勢神宮の成立の一部をなす内宮祭神「天照大神を国主神」とみなす観念の形成である。いうまでもなく国主神というのは日本の統治権をもつ神を意味する。伊勢神宮が天照大神国主神観を形成し、広げる拠点の一つであり、この観念は、神宮が諸国で神領を獲得するうえで大きな役割を果たした。一二世紀の東国の武士の間でこの観念が広がっていたことが、それを示している。しかし国主神観は日本、およびその国土意識と密接に関わる観念であり、もともとその生成がなされたのは伊勢神宮ではなかった。それが創成されたのは真言系の護持僧の世界であり、一一世紀後半に天照大神と大日如来の習合説にもとづいて、天照大神を「大日本国」の本主とみる考えが生まれた。こうした習合説は遅くとも一二世紀初めまでに伊勢神宮にもたらされ、もたらあつた天下の人民を加護する神であるという観

念と結びつき、伊勢において、天照大神の国主神観が定着したと考えられる。その時期は一二世紀前半であろう。この観念は神国の統治権者を指定するものであるので、神々の系譜にも大きな影響を与え、天照大神を天神と区別して地神となし、地神五代の初代とみなす新たな神統譜も形成された。この天照大神を地神とみなす観念の形成にあたって、国主神観が決定的な影響を与えたと考えられる。そして一二世紀後半には神統譜の世界でも天照大神を最初の国主とみなす見方が定着する。

二〇〇七年度

史学研究大会・総会の記録

史学研究会の二〇〇七年度大会・総会は、一月二日(金)一三時から一七時まで、京都大学文学部新館において開催された。

総会では、金田章裕理事長による挨拶の後、戸祭由美夫氏を司会に選出して、庶務・編集・会計に関する報告・審議がなされた。

庶務(田中和子常務理事)からは、役員交代、二〇〇七年度の例会報告、会員数・史林送付数の動向などについて報告が

あった。また、来年四月一九日(土)の例会開催(テーマ「環境」)が案内された。

編集(南川高志常務理事)からは、『史林』が順調に刊行されていること、本年四月に開催された「モニュメント」をテーマとしたシンポジウム形式の例会の発表と討論が第九一巻一号の特集号にまとめられる予定であることが報告された。

会計(吉川真司常務理事)からは、二〇〇六年度決算報告、および二〇〇七年度予算案が提案され、拍手で承認された。また、『史林』の書店販売に向けての準備状況が報告された。

これに引きつづき、公開講演が行なわれた。講演は次の二本であった。

檀 上 寛 氏

「十四—十七世紀の海禁と

朝貢・互市の構図」

勝山 清次 氏

「中世伊勢神宮の成立と権門体制」

講演者紹介と討論司会は、それぞれ夫馬進理事と吉川常務理事がつとめた。講演内容は本号に掲載されているが、ともに刺激的な内容の充実した研究報告であった。聴衆の関心も高く、討論が活発に行なわれた。

公開講演ののち、濱田正美理事が閉会の

辞を述べた。大会終了後、オープンな立食形式の懇親会が開かれ、学生・院生を含む大勢の会員の参加があった。

なお、総会と大会に先立って開催された秋期理事・評議委員会において、庶務、編集、会計、広報、それぞれの担当の常務理事から会務報告のほか、第九一巻一号の『史林』から、書店での販売を目指して準備する旨の説明がなされ、了承された。

(文責・田中和子)

会 告

本号は定価二〇〇〇円ですが、会員価格は二二〇〇円に致します。

編 集 後 記

九一巻一号をお届けいたします。『史林』は本号より毎号、一部を東京堂出版に委託し、書店にて販売することとなりました。このことに伴い、表紙の体裁も部分的に変更しております。

また、本号は九〇巻一号(「国境」)に続き、史学研究会例会の特集号となります。特集号の最大の魅力は、歴史学、地理学、考古学の多様な研究者が単一のテーマを追究する点にある、といえるでしょう。西洋

近現代史を専門とする筆者も、「モニュメント」という人口に膾炙して久しいテーマを、他の分野ではどう扱うのかに関心を抱きました。皆様はいかがでしょうか。次回例会(四月一九日)のテーマは「環境」です。ご来聴を心よりお待ち申し上げます。(詳細は次頁をご参照ください)。(堀内隆行)

◆史学研究会ホームページ・アドレス

<http://www.soc.ni.ac.jp/sh/index.html>

本誌には独立行政法人日本学術振興会平成一九年度科学研究費補助金(研究成果公開促進費)が交付されております。

二〇〇八年 一月二五日印刷 定価二〇〇〇円
二〇〇八年 一月二二日発行
史 林 第九一巻第一号(通巻第四百三三号)

京都市左京区吉田本町京都大学大学院文学部研究科内

電 話 (〇七五) 七五三二一七八七
FAX (〇七五) 七五三二一七八七

発行人 史 学 研 究 会

振替京都〇〇七〇二二五五五番
理事長 金 田 章 裕

印刷所 中村印刷株式会社
京都市南区上島羽薬田二九